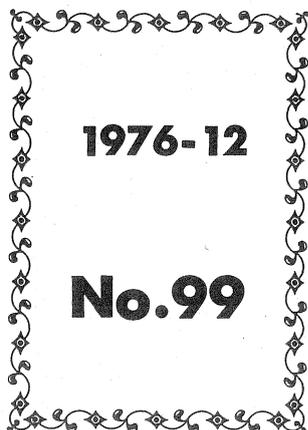


## も く じ

文化に想う	木田 宏…… 4
文化の意味	中村光夫…… 6
芸の坂道	中村歌右衛門… 7
芸について考える	矢野重典…… 8
町名の改正	宮本又次……10
第4回WIPO一般総会等に参加して	大山幸房……11
我が町、我が村の文化行政	
公家さんの開いたまち 高知県中村市……………12	
地方ニュース……………13	
文化庁ニュース	
文化勲章に井上靖氏ら5人、文化功労者に黒沢明監督 ……14	
紫綬褒章・藍綬褒章・黄綬褒章の受章者決まる ……14	
中河与一、横溝正史、本田安次、森田沙伊の各氏に勲章…15	
第23回文化財保護強調週間……………16	
昭和51年度文化財指導者講習会行わる ……16	
昭和51年度都道府県文化財保護指導委員研修会開催さる…17	
第11回全国史跡整備市町村協議会の開催 ……17	
昭和51年度重要文化財建造物保存修理事業	
主任技術者事務打合せ会開催さる……………17	
社団法人全日本合唱連盟「試験研究法人等」に入る ……18	
日本語教育センター新庁舎の落成披露 ……18	
神道美術展、大きく扱い……………18	
11年目に入った国立劇場 ……19	
新法人紹介 ……19	
すうじ……………20	
文化財保護法教室(7)……………22	
〔紹介〕 イタリアの文化財保護法(I)	
	椎名慎太郎…24
文化庁への便り……………28	



表紙：大官大寺出土 隅木の飾金具  
(奈良国立文化財研究所発掘調査)

題字デザイン：桑 山 弥 三 郎

## 文化の意味



中村光夫

(日本芸術院会員  
文芸評論家)

文化庁に行くたびに思ふことは、この文化を司る役所が、なぜ文部省に間借り格好であるのだろうか、といふことです。文部省は事実上教育省だとすれば、「文化」が「教育」より狭い範囲のものしか指さないといふのはおかしいのではないでせうか。

むろん、国家が教育に関与するやうに文化一般にかかはるべきか、今でも国家が教育を支配しすぎる傾きがあるのに、文化もその程度に国家によって把握されるべきかは問題であり、官制の沿革その他の事情で、理窟はなかなか通らないでせうが、素人なりに言葉の意味から推して行けば、「文化」はあきらかに「教育」を抱括する概念です。手近かの「大言海」をひくと「文化」にカルチュアの訳語として、「人間が自然を征服支配して、本来、具有する究

極の理想を実現完成せむとする過程の総称。かかる過程の産物は、学問、芸術、道徳、宗教、法律、経済など是れなり。」

とあります。教育はここにあげてありませんが、当然入れていいわけですから、人間の社会生活の上で必要としてつくりだされたものはすべて文化といふべきでせう。

これでは逆にひろくなりすぎて、お役所の管轄をきめるのに困るかも知れませんが、元来文化は、このやうな散文的、日常的なものを含むといふことを忘れてはならないのです。

教育も文化だし、食事も文化です。朝おきてから夜ねるまで、あわてず、争はず、一日の生活をむらなくすごして行けるなら、僕らは最上の文化を身

につけたことになるわけだ。

文化は「自然物」でない限り、その保持に意思と忍耐を必要とします。すなはち、祭りの反対のものです。

敗戦後「文化の日」といふ祭日ができるまでのいきさつをきいたことがあります。戦前の明治節を何かの形でこさうとする日本側が最初これを憲法記念日としようとしたのにたいして、占領軍当局は明治天皇の記憶と、憲法の記念日を重ねあはすのは好ましくないと反対して譲らず、妥協案として、これを「文化の日」とすることに決めたといふのです。

「文化国家」などといふのが相言葉のやうにつかはれてゐた時代ですから、「文化」といはれてしまへば、誰も文句が言へなかつたし、毒にも薬にもならなくて、どこにも使へる便利な言葉であつたのでせう。

文化庁の「文化」はこの「文化」とは違ひますが、少し美術や演劇などの芸術に偏りすぎてゐるやうです。芸術と文化を同義語にすると芸術以外のものは非文化といふことになり、本当の文化が社会に根を張れぬことになりま

## 中村光夫氏の近況

文芸評論家中村光夫氏といえば、あの格調高い「ですす調」の文章を思い出す。

「二葉亭四迷論」があるが、最近「二葉亭四迷伝」(講談社文庫五十二年九月)を出された。「風俗小説論」など文芸評論で名が高い。小説(「或る愛」(新潮社))、翻訳、戯曲と氏の範囲は広い。

明治大学文学部教授として、週一日は、鎌倉の自宅から神田駿河台までフランス文学と日本文学の講義にお出かけになる。昭和四十五年七月一日以来、国語審議会委員。日本芸術院会員。日本文学協会理事。日本ペンクラブ理事。

目下、氏は、来年上梓を予定されている戯曲「雲を耕す男」(集英社)の仕上げでお忙しい。

この戯曲は、一八六〇年代、パリ万国博へ江戸幕府の使節として派遣された栗本鋤雲(一八二二—一八九七)を主人公として、その苦しみや悩み、西洋への憧れ、フランスと結ぼうとする幕府の方針への疑いなど若き下級武士の姿を通して、幕末を描くという。

中村光夫氏は明治四十四年、東京生。

本名木庭一郎。御長男である。理論物理学で昭和四十八年、デンマークで客死された木庭二郎教授(京大基礎物理学研究所・ニールス・ボーア物理学研究所)、東京農工大教授(物理学)木庭三郎教授はいずれも御令弟、学者一族である。(写真は講談社提供)

編集後記

○本年の文化勲章に井上靖さんが選ばれた。「猟銃」「闘牛」「比良のシヤクナゲ」「ある偽作家の生涯」「通夜の客」と氏の初期の作品を愛読した一人として、氏の受賞を喜んでゐる。

○本誌は、どうしても、発行が遅れてしまふ。文化行政長期懇のことが、十一月三日の各紙にのつたが、種々の都合で五十二年一月号でお知らせすることになつた。記事の遅れはともかくとして、月はじめに、その月の号を出すように努めるつもりだ。

○文化庁月報の今後の方針として、文化論や文化関係の統計資料、各国の文化行政、文化事情紹介等の欄を充実していきたい。幸い、十二月号から四頁増(うち一頁は広告)である。少しずつ、内容を改善し、部厚くしていく。各界の方々からの投稿をお待ちしている。(大家)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業課  
電話(〇三)二六八―二四一

『文化庁月報』 十二月号

(通巻第九十九号)  
昭和51年12月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号  
発行所 株式会社 ぎょうせい

本社 東京都中央区銀座7丁目4番12号  
営業所 〒162東京都新宿区西五軒町52番地  
電話(〇三)二六八―二四一(代表)  
振替口座 東京 九一六一番  
印刷所 (株)行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)

年間購読料 一、八〇〇円